

日本の絵画に見る服飾の美意識 -日米の学生の比較-

○武藤舞* 吉岡徹* 市原茂**

大妻女子大家政* 東京都立大**

目的：日米の学生に和装画を官能評価させ、両者の評価の違いについて検討、日本の服飾の美意識について考察する。

方法：試料は奈良時代から明治時代までの以下の12の図版である。1.「吉祥天画」2.「住吉物語絵巻」3.「寛文美人図」4.「大川端の夕涼み」5.「雪晴れ」6.「虫籠をもつ母と子」7.「見返り美人」8.「春」9.「ねざめの恋」10.「貴顕舞踏の略図」11.「序の舞」12.「おないどし」。被験者はアメリカの美術大学生男子3名と女子16名、日本の女子大学生19名、10個の形容詞を用いて7段階によるイメージ測定を実施した。日本語による評価語はシック、好き、上品な、洗練された、派手な、退廃的な、豪華な、色っぽい、あだっぽい、洗練された、英語はChicness, Liking, Refinedness, Sobriety, Garishness, Decadency, Gorgeousness, Sensuality, Voluptuousness, Polishedを用いた。シアトル及び東京で、1996年1月と2月に北窓昼光で、天候は晴れの条件下で実験を行った。

結果：因子分析の結果、次のように考察出来た。日米とも3因子が抽出され、その因子構造は明らかに異なった。日本人の場合は、「上品な」「洗練された」と「好き」が一つの因子にまとまった。アメリカの場合には、「豪華な」「色っぽい」と「好き」が一つの因子にまとまり、日本人が上品で洗練されたものを好むのに対し、アメリカ人は色っぽいを好む傾向があることが解った。